

「模倣される体験」に関する一考察

—風景構成法による模写セッションの分析から—

浅田 剛 正*

I 問題

模倣されることで生じる感情体験

本研究では、“自身を模倣される体験”という身近で一般的とも言えるような体験を、心理臨床における面接関係の構造に接近させつつ検討する。一般的な感覚として、自分と同じ服装をされたり、自身の真似をされたりすることによって、ある種の感情体験を経験することは珍しくない。子ども同士がわざと言動を真似てみせることで相手をからかうといった行為が、一定の意味を持ったやり取りとして自然発生的に成立するのは、互いにそれが特定の感情体験を生起させることを前提として共有しているからとも言える。文学的モチーフとして自身の似姿との衝撃的な関わりを扱っている作品も多く、例えば『プラハの学生』（ハンス・ハイント・エーヴェルス原作）、『ウィリアム・ウィルソン』（エドガー・アラン・ポー作）、『二重人格』（ドストエフスキー作）など、著名な作品も数多い。これらの作品では、主人公がいわゆる分身（ドッペルゲンガー）と遭遇するところから始まり、その分身が実在の生きた人物であるかどうかを抜きにして、その出会いによって主人公が混乱し、分身に対して強い忌避感、攻撃性を表し、最後には悲劇的な結末へと進んでいくというプロセスが、圧倒的な迫力を持って描かれていることが共通している。

Rank, O. (1914)は、主人公の前に現れた分身との奇妙な関係と悲劇的な結末について、精神分析的立場からの詳細な考察を加えている。Rank, O.は、こういった分身に対する体験世界を自らも持つと思われる詩人や作家自身の病的な精神構造と、未開人の影や鏡像などにまつわる民間信仰（迷信）の一致を指摘し、分身との出会いの過程に、死の脅威に逆らう主体の原初的なナルシズムを見出す。つまり、影や鏡像、もしくは肖像として、自らの分身との関係を特殊な意味づけを伴って描き出す“奇妙な表現形式”は、死の脅威と脅かされたナルシズムの自己主張によるものとするのである。

また、河合(1971)においては、分身はコンプレックスとの関連で説明がなされており、分身や二重人格として現れる“もう一人の私”は暗い色合いを持つばかりでなく、見方によっては自我の一面性を補う可能性を秘めたものとしても捉えられ、個性化への過程に重要な役割を担う影との関連で論じられている。いずれにせよ、そこには分身が実在するかどうかというようなオカルト的なテーマよりも、主体が自らの外に自らの似姿を見出すという現象として、〈私〉の在り方を

* 京都大学教育学研究科

めぐる極めて心理的なテーマが内包されていると言えるだろう。

〈私〉の出会い

自身を模倣される体験を、〈私〉の分身との出会いという観点から捉える場合、これはある種の病的体験として考えられることが多い。分身、二重身、ドッペルゲンガー、二重人格、あるいはゲド戦記に描かれる「影との戦い」のような現象は、個人の中での強烈な体験を伴い、それゆえ死とも表裏一体のイニシエーション的過程として表現される。こうした衝撃的な体験は、ともすれば人の心理一般とは隔絶した、あくまで特異な例としても捉えられかねない。

それに対して、外界における自身の似姿、すなわち鏡像との出会いに、人間一般における発達的に重要な過程を見出したのは、Lacan,J.である。Lacan,J.(1949)は、鏡像段階と名付けた生後6ヶ月から18ヶ月の間の幼児に起こる自らの鏡像との出会いの中に、幼児が自らを一人の人間として社会に位置づけるために通過すべき、主体にとっての重要な契機を見出した。鏡像段階は、Lacan,J.によって“精神分析がこの用語にあたえる全き意味で同一化のひとつ(une identification)”として位置付けられ、その機能は“生体とその現実との関係—あるいは人の言うように、内界(Inn-enwelt)と環界(Umwelt)との関係を打ち立てるといふ、イマージュの機能のある特殊な場合として明らかになります。”と述べられている。この“成熟の正常化”の時点では、“内界から環界へという円環の破壊”、すなわち、社会的に加工された諸状況に結び付けることにより、人間としての〈私〉を偽りの形で構成することが可能となる一方で、それ以降の〈私〉の精神構造に“自我の内容点検というきりのない計算問題を生じさせ”るのである。ここに至り、不安定に構成された人間としての〈私〉は、環界に在る他者の中にも自身を見出すことが可能になり、逆に“模倣される”ということに、主体に関わる特別な意味を付与する生物となるのではないだろうか。

このような鏡像との出会いの重要性は、幼児に限らず、心理療法や心理臨床の実践で営まれている生身の人間関係にも見出すことができる。伊藤(2001)は、“発話者としての〈私〉”が、分裂した言表行為者である〈私〉と言表内容である〈私〉との出会いの場に生成するものであり、クライアントは、自らの在り様を真摯に聴くセラピストとの関係において、存在そのものから宿命的に切り離されていく人間としての傾向性を、「死の欲動」として〈私〉の出会いの内に抱えることができると述べる。そこでは、セラピストがクライアントにとっての“生きた鏡”として機能する中で、“発話者としての〈私〉の生成”が可能となる過程が示されていると言えよう。

内界と環界とのいわば偽りの分裂関係が成立するという人間としての根本的な過程を、Lacan,J.が鏡像との出会いにおいて明示したように、〈私〉という概念は、生物学的意味での単一個体としての私ではなく、常に内界と環界との不安定な関係の上に成り立つ〈私〉として考える必要がある。そして、心理臨床的な面接関係には、クライアントがセラピストとの関係の内に、この〈私〉における鏡像的な出会いを再体験するような構造が、その基礎として含みこまれているのである。

描画表現を模倣される体験の検討

ここまで述べてきたように、「模倣される体験」についての検討は、主体の成立や帰結にまつわる種々の現象や、心理臨床的面接関係の構造に重要な関連性があると考えられる。そこで本研究では、描画を用いた具体的なセッションを取り上げ、描画表現を模倣されるそこでの体験がどのようなものであるのかについて、改めて実証的な検討を試みたい。

Jung,C.G.(1929/1989)は場合によって患者に自らの夢やイメージを描画として描くことを勧めることを提唱し、その描画表現における患者自らの気付きに意味を見出していた。現在では多くの心理臨床実践場面において、描画はアセスメントや心理療法の一方法として用いられているが、皆藤(2004)が“風景構成法は心理臨床の一技法であるから、心理臨床を实践することと風景構成法を实践することとは、根本的に同じである。”と述べるように、描画を通したやり取りの中にも、上記のような〈私〉における鏡像的な出会いが含みこまれているとも考えられる。

模倣される体験そのものがどのような形、プロセスで生じてくるのかを検討する心理臨床学的な実証研究はこれまでなされていない。上に示したような模倣や分身との出会いに関する構造的な重要性を検証するためにも、本研究はその基礎的な段階に立ち戻り、描画表現という枠内における、表現者にとっての「模倣される体験」の実証的な検討を試みる。

方法の検討

本研究では、被験者にとって言語化は困難であるが一定の感情体験を伴って想起されることが予想される「風景イメージ」の表現を、調査者が模倣するというセッションを試行する。原風景の語り(表現)について研究した呉(2001)は、“空間・風景・場所の体験を語る調査研究のなかで、いつのまにか私は語りが「自分語り・私の物語」になっていると感じました。しかし、同じ空間・風景・場所の体験をしても、語る時の様子や自分自身への意味付けは人それぞれ異なることが分かりました。”と報告している。また、被験者が「風景イメージ」の表現において体験するプロセスをある程度統制することと、そのプロセスを後で追って検討しやすくするために、本研究では中井(1973)の風景構成法の手順に沿って、風景イメージに一般的に組み込まれやすいと思われるアイテムを調査者が順に提示する形を採る。

風景構成法とは“関与しながらの観察(Sullivan,H.S., 1945)”を原則として、川、山、田、道、家、木、人、花、動物、石の10個のアイテムと、何か付け足したい物を検査者が一つずつ順に提示し、被験者はそれが一つの風景となるよう画用紙に描いてから、最後に彩色を施すという方法である。本研究でも、このような風景構成法の手続きに倣い、各アイテムの提示を「～はありますか?」という提示の仕方、被験者に風景イメージを描画に表現させ、その上で、その描画を調査者が模写するというセッションを試みる。

II. 目的

本研究が目的とするのは、自らの風景描画表現を模倣される体験が、被験者の内に、どのような形、プロセスで現れるのかについて明らかにし、検討してゆくことである。そのことを通じて、主に描画表現を用いた心理臨床的面接関係に組み込まれる、〈私〉の出会いに関する接点を探りたい。

III. 方法

被験者

「あなたの風景イメージについて調べさせてください」という教示で被験者を募集し、26名の協力が得られた。被験者は男性7名、女性19名、平均年齢は22.6歳 (SD3.3) であった。セッションは静かで落ち着いた個室で行ない、時間は最大90分としたが、それを超過することになった2例のみ日を改めて実施した。被験者には、前もって「あなたにとっての「風景」の中で、最も大切な要素は何ですか?」という質問項目を含めた質問紙の記入を求めた。

手続き

まず、被験者が風景のイメージを表現するために、次の教示を与えた。

「今から「風景」の絵を描いていただきます。うまい下手を見るのではないので気楽に描いてみてください。基本的に自由に描いていただいてもよいのですが、目安としてこちらが描くものを一つずつ言っていきますので、それがあなたの風景にあれば、その順に描いてみてください。もし描かなくてもよいものがあれば、描かなくても構いませんし、他に描きたいものがあれば、こちらが指定した後に、描いていただきます。まずはペンだけで描いていただき、その後自由に色を付けていただきます。」

教示の後、川、山、田、道、家、木、人、花、動物、石、その他の順にアイテムを提示し、その後、自由な順序で彩色をすることを求めた。描画が完成したら裏に記名し、事前に行なった「あなたにとっての「風景」の中で、最も大切な要素」に関する質問紙の記入を再度求めた。

次に、被験者の作品は被験者の目の届く場所に伏せて置き、調査者は被験者が見ている前で、被験者が表現した風景描画を元の描画を見ずに模写した。その際の教示は次の通りである。

「それでは、今度は今あなたが描いた風景を、調査者も描いてみます。それを見ていて、どのような感じだったかを後で教えていただきたいので、私が描いているのを見ながら、シートの指示に従って、私の描く風景を見て、あなたがどのように感じたかを記入してってください。」

被験者は、自身の風景描画が模倣される過程で、以下の方法でその体験を自己評定した。すなわち、調査者が模倣する風景描画のアイテムごとに、「0:まったく違和感を感じられない」から「4:非常に違和感を感じる」までの5件法の評定スケールと、それぞれに関してその理由、気づいたこと、感じたことを適宜自由記述することを求められた。すなわち、素描段階と彩色段階に

分けて、被験者は、調査者が被験者の風景描画を模写しているのを見ながら、各アイテムが順に描かれるごとに上記の違和感評定と理由の記述を行なった。施行後、再び質問紙の記入を求めた後、模写時の違和感評定と理由記述を元に、模写された体験に関してインタビューを行った。インタビューでは、①各アイテムについて感じた違和感について、②調査者に伝わっているところ、違うところ（気になるところ）を中心に聴き取りをおこなった。インタビュー内容は、被験者の許可を得て録音した。

IV. 結果と考察

違和感の諸相

調査者が描く模写描画は、元の描画を見ずに描かれており、結果、厳密に言えばすべての物理的要素が異なっている。つまり、模写描画すべてに対して違和感を感じて然るべきである。しかし、被験者は、被験者独自の視点に基づいて、その違和感を重み付けしており、その違和感の語りには質的に異なる様々な形式が見出された。

模写セッションで生じたこの被模倣体験は、被験者自身の言語化以前の体験そのものを含むので、ボトムアップ的にその体験内容の構造を紡いでいく必要があると考えた。そのための方法として、本研究では木下（2003）による修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、M-GTA）を参考にしながら、調査で得られた被験者の違和感体験の質的な分析を行なった。M-GTAでは、研究者が分析テーマを定めた上で、質的データの関連箇所に着目し、それを具体例としてつ、他の類似具体例をも説明できると考えられる説明概念を生成する。同時に、他の具体例を探し、新たな概念を生成しつつ、各概念は類似具体例の確認と、対極例についての比較を通じて解釈が恣意的に偏る危険性を防ぐという方法を採用。これらの分析手順に基づき、以下の分析を行なった。

まず、アイテムごとに被験者が評定の際に記入したメモと、そのアイテムに関するその後のインタビュー回答を全て抜き出した。それらの理由の記述内容、およびインタビュープロトコルを筆者が丹念に読み込み、分析テーマとして、「描画を模倣される体験は、どのような語りとして表されているか」と定めた。そこでの被験者の体験が、どのような表現として語られているかに着目し、データに見られる質的な特徴を抽出した。その際、理由記述とプロトコルの背景としての被験者の体験について、筆者の主観に基づいて行き過ぎた解釈をせず、あくまで被験者の表現の形式に準拠するよう留意し、1名の協力者と共に分析を行なった。

以下、被験者の風景描画表現を模倣された体験に関する表現形式に見出された概念を、4つのカテゴリーに分けて報告する。

カテゴリーA；模写描画と元の描画の客観的比較に基づいた環界体験としての語り

「(川について) 私の描いたのはなんかもっと長かった気がする。(被験者No. 10)」や、「私は山

は3つ描いたが4つに増えていた。(被験者No. 24)」など、描かれた形、角度、色の種類、大きさ、位置などの、客観的な検証が可能な相違に関する要素に言及する語りが特徴的に見られた。模写描画と元の描画との比較によって客観的な検証が可能であるということは、それが異なる被験者にとってもその指摘が可能であるということになる。これは比較される描画表現がいずれも被験者自身と切り離された外側の事象として語られていると捉えられ、これらの体験の語りを「模写描画と元の描画の客観的比較に基づいた環界体験としての語り」とした。

カテゴリーB：模写描画によって生じた内界体験としての語り

「(川について) まっすぐ、もうちょっとなんか流れてる感じ・・・ゆらりと流れてる感じがイメージなんで違和感感じました。(被験者No. 9)」といった体験の語りは、被験者が主観的に感じる「ゆらりと流れている感じ」がないことに基づいており、描画によって自身の内界に生じる体験として語られていると言える。他にも、「葉っぱが元気だなんて思いました。(被験者No. 3)」、「ちょっと花の数は多くてうるさい感じ。(被験者No. 10)」など、カテゴリーAの客観的な違いについてよりも、そこから感じられた自身の主観的な印象を中心に語られている体験は、「抽象的印象表現による内界体験としての語り」としての下位カテゴリーに属する概念と考えられた。

また、「人がもうちょっといつでも木に寄り掛かれそうな感じで考えてたんですよ。だから、なんか離れたなとは思いました。(被験者No. 7)」や、「花は道端に咲いている。そこを歩く人の目を和ませるために。／植えられた花で、道を通る人のためにあるから、向こう岸にあると、だめなんですけど。(被験者No. 14)」などは、描画で描かれたアイテムが、風景の中の世界の内に位置づけられていると言える。これらを、描かれた風景の世界の内に展開する物語として、人が「木に寄り掛かれたい」ことや、花が「道を通る人の目を和ませられない」ことについて言及している語りであると考え、「物語的表現による内界体験としての語り」の下位カテゴリー概念を見出した。これらのように、模写された描画から生じた、被験者の内界における印象、意味づけ、感覚について言及している語りを「模写描画によって生じた内界体験としての語り」としてカテゴリー化した。

カテゴリーC：被験者と調査者との表現行為の比較に基づいた環界体験としての語り

「(木の) 単純に描き方、描く順番が違くなって思っただけです。(被験者No. 16)」、「私が最初に描いた時は途中から川を描き、最終的には山と繋げたが、それを再現しているのが面白かった。(被験者No. 24)」などは、描画に描かれた内容でなく、模写する調査者の行為について語られている。ただし、これらはカテゴリーAと同様に客観的に検証可能な相違について言及されている語りと考えられるため、「被験者と調査者との表現行為の比較に基づいた環界体験としての語り」とした。

カテゴリーD；調査者の模倣行為に対して生じる内界体験としての語り

「描く際のペンの迷いが気になる。(被験者No. 5)」、「私が思っこの色にしようと思ったそのプロセスをわからないんやろうな、と。わかって塗ってないから、やっぱ違うなって。同じ色塗ってても、違うなあって思った。(被験者No. 21)」などは、調査者の行為について語られながら、客観的に検証可能な相違についてよりも、被験者自身の内界に焦点付けられている。これらを「調査者の模倣行為に対して生じる内界体験としての語り」とした。

ここで得られた4つのカテゴリーは、環界体験としての語りであるか、内界体験としての語りであるか(カテゴリーA・C/カテゴリーB・D)によって大きく分類される。つまり、被験者は、自らの風景描画表現を模倣される体験について、〈私〉の内界と隔絶した外側の体験として語る場合と、〈私〉の内界に起こった体験として語る場合とが見られた。

本調査では、違和感を感じるかどうかについて被験者に問い、その違和感体験に関する報告を求めたため、「模倣される体験」の内、違和感的な体験に被験者の報告が偏ってしまった。しかし、「違和感を感じた」という評定を、被験者の体験語りのひとつと捉えたならば、違和感を感じた「違和感的体験の語り」と、違和感を感じなかった「融和的体験の語り」の軸が新たに加わると考えられる。したがって、「模倣される体験」は、(a) 違和感的体験 - 融和的体験、(b) 環界体験 - 内界体験、(c) 描画から生じた体験 - 表現行為から生じた体験、の3つの次元で語られうるということになるのではないだろうか。例えば、(c)の内、「描画から生じた体験」に限定すると、(a)軸と(b)軸によって被験者の違和感体験の語りは、図1のように配置される。

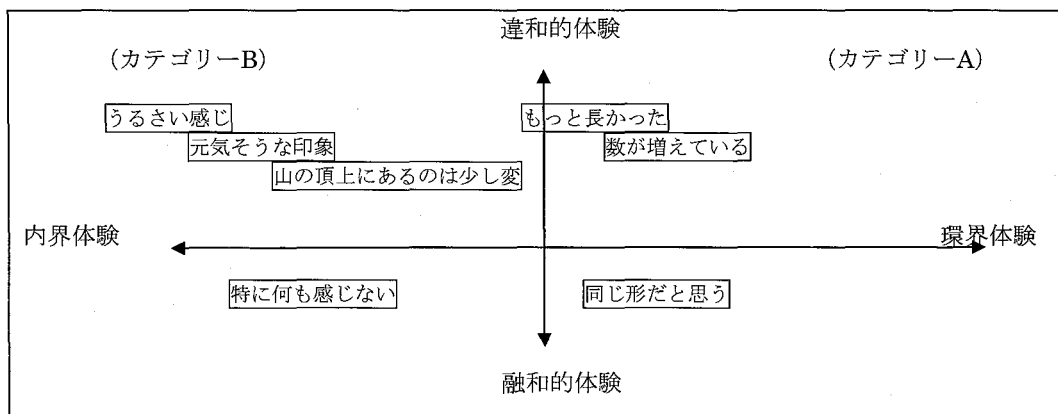


図1 描画から生じる「模倣される体験」

(c)のもう一方にあたる「表現行為から生じた体験」に関しても、語りの配置を同様に描けるが、ここでは「描画から生じる体験」を基に考察を進めたい。

すでに述べたように、模写描画と元の描画とはそもそも全ての点について異なるものでありな

から、一方で被験者の風景イメージの表現であるという面では同じものである。また同時に、模倣された描画は元の描画とほぼ同じものであるとしても、被験者と調査者はそれぞれ別の内的体験を持って描いているとも言える。被験者はこの二重にねじれたようなセッションの状況に置かれるのである。そうすると、図1の第一象限は、客観的に異なる描画の物理的視覚的な違いを「違う」と指摘しており、第三象限は同じ風景イメージを描こうとしているという主観的前提に沿って、「同じ」と報告している。これは前者のねじれの状況に沿った体験様式であると言えよう。それに対して、第二象限、第四象限にあたる体験の語り、すなわち内界体験における違和感と環界体験における融和感、同じ風景イメージであるはずなのに「違う」と語り、異なる絵であるのに「同じ」と語るという、後者のねじれに沿った体験様式となる。

Jung,C.G. (1921) は、イメージを“外的客体の心的模像ではなく、むしろ詩の慣用句としての「思い浮かべること」、すなわち外的客体の知覚とは間接的にしか関係のない夢想イメージを意味するもの”と述べたが、この意味での「イメージ」と「外的客体の知覚」は、本論での内界体験と環界体験とそれぞれ同じものを指していると思われる。また、河合 (1991) は“イメージの世界で話を聴くということは、「夢を現実のように、現実を夢のように」聴いている、と言ってもいいかもしれない。これらはほとんど同じことなのである。夢を現実とおなじくらい大切に、現実を夢と同じくらい大切に聴いている、と言っていいだろうか。”と述べているが、描画模写に伴うねじれた体験様式は、構造的に夢と現実とを表裏にしたメビウスの輪のような体験に近いものではないだろうか。

模倣される体験プロセス

以下では、ひとつのセッションを取り上げ、風景イメージに関する上記の「模倣される体験」の諸相が、セッションのプロセスにおいてどのように現れてくるのかについて検討する。

Aさんの模写セッション

取り上げるのは、Aさん（被験者No. 8、23歳女性）との模写セッションである。Aさんが風景描画を描いていくのを見守る過程で、調査者は道の両脇に並べられた花に物語性を感じ、人がこれから山に向かって歩いていくための、まさに花道といった連想が湧いた。また、空が曇っているように描かれたことを印象的に感じていた（図2）。

風景描画の「風景の中で最も大切な要素」は、セッション前は「雲間からさしこむ光」、風景描画を描いた後は「山に続く道」、そして、模写後には、「山に続く道にプラスして、山の荘厳さ、神秘さ。」となっていた。

インタビュー

<最初の川とか山とかはどんな感じ？>川が、私のイメージはもうちょっとゆるやかに、こう

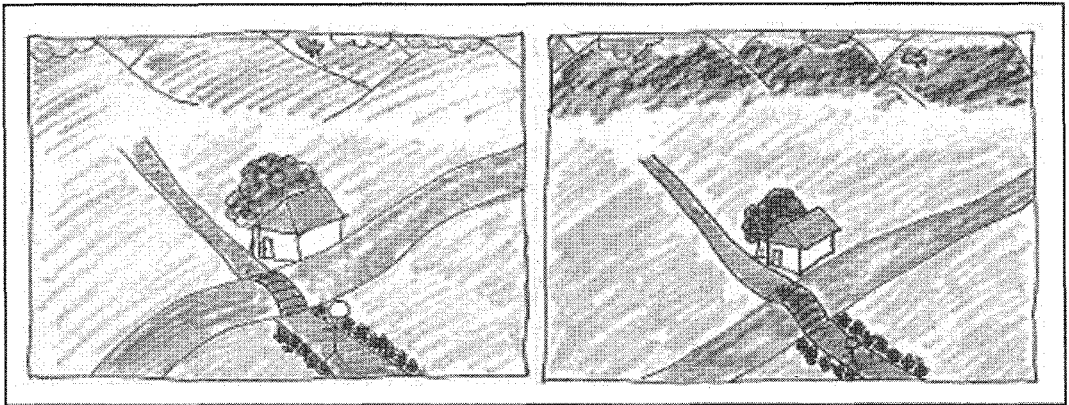


図2 Aさんの風景描画（左）と調査者による模写描画（右）

クネットになってるイメージがあったので、ちょっと違うかなとは思いました。で、山は、なんか、すごいずっとひろがってるイメージがあったので、それはこんな感じだなって。①<道は？>道は、細くなっていて、自分のイメージは山に続いていくイメージがあったので、こっちの方がむしろイメージに近いなって思って、あ、こんな感じだなって思って見てました。②<家？>私の家は変な構図になって。(模写は)すごい家っぽくなって思って。あと、木の感じも私より木っぽくなって思って、この辺は全然違和感を感じなかった。<描き方の違いとかは別に？>そういうのはあんまり気にならないですね。

<人とか、花とか？>花はぜんぜん気にならなくて、人は私が描いたやつよりはちっちゃいかなって思ったんですけど、たぶんこれくらいが自然なんだろうなって。<鳥？>鳥すごい。私が描いたやつっぽくなって思って。私が描いた鳥自体はこんなイメージじゃなかったんですけど、違和感は全然なくて…。③<イメージじゃない鳥と似ている？>そうですね。<雲の感じ？>雲が、描いたやつは、ちょっとモコモコしてるなっていうのあって。私もそういう風に描いたんですけど、なんか、私がちょっと横に薄く伸びてるみたいなイメージがあったので…。そんなに重たい感じではないイメージだったっていうのはちょっとありますね。④

<色つけの段階は？>川とか道は全然こんな感じだなって思うんですけど、すごい小さいことなんですけど、道描いた時になんか人まで塗られて、ちょっと、「あ…」って思って。⑤頭、私も身体は塗っちゃったんですけど。<あ、そうか、頭は…。>たぶん私は大きくって、道からはみでたんですよ。それでなんかちょっと「あ」って思ったけど別に、まあいいかなって。で、なんか、家とか木とか花は全然違和感はなく、なんか、地面が、もうちょっと薄い方が良かったかなって。すごい丁寧にぬってくれてはるなって思ったんですけど、もう少し薄くっていうのと、なんか、こう、山まで侵食してそんな気がして…。もうちょっと手前かな、この道くらいまでかなっていうのがちょっとありました。⑥鳥とか山はそんなにないです。<山はこの（雲のかかっている）辺が大事なのかな、とってたんですけど。>なんか、それだからこの辺から山だっ

たんですけど、これくらいの方が多分遠くにありそうな気がするんで、山はこれくらいでいいのかもって思った。

＜真似されて、全体としてどうでしたか？＞すごい、私が描いたやつよりはっきり濃く描いてはるんで・・・私の中でもっとモヤッと霧がかかった感じの、うっすらしたイメージだったので、そういうところはちょっと違うかなって思うんですけど…。なんか、すごい明るくなった感じがしますね。なんというか、メルヘンチックになった。⑦＜こっち（模写）の方がメルヘン？＞うん。＜もっと現実的な感じだった？＞現実的ではないかもしれないですけど、なんか、もっと不思議な感じ。なんかわからないけど、どっちかっていうと、（模写は）メルヘンって感じで、私のはRPGみたいな、なんかもう少しドキドキするっていうか緊張感があるみたいな感じ。⑧

＜どのへんが伝わってると思う？＞このすごい忠実なのと、でも人が…向かって行ってるような感じがするのは、すごいそういう感じだなって。あと、山の感じが。うん。雲の線とか描いたときはそうでもなかったけど、塗ってみると、雲、空とか「モヤッ」てなってるのが、すごいこんな感じだって思っ。なんか、道の山のあたりはすごいイメージ…すごい伝わってるなあって思いました。⑨＜伝わってないところは？＞ここっていう所はないんですけど、部分的にというよりは、明るいかなって思いましたね。

Aさんの「模倣される体験」についての考察

①においてAさんは、自身の風景描画を模写される体験を「模写描画によって生じた内界体験としての語り（カテゴリーB）」として語っている。川について、Aさんは「ちょっと違うかな」と感じ、山については「こんな感じだな」と感じている。語りの上では川が山に比べて違和的であるようにも取れるが、実際の描画を見てみると、物理的な違いの程度の差は一概に判定できないであろう。むしろ、色や数の違いからは、山の違いがより明確であるようにも思われる。しかし、Aさんにとっては、川に「クネッてなっているイメージ」がない違和感（図1の第二象限）、山に「広がっているイメージ」を感じる融和感（第三象限）に、体験として重きを置いているのである。続く②の語りにおいても、道の細さが自分の描画に比べて細くなっていることを、Aさんは認識しているが、そのことについては問題とせず、むしろAさんにとっての「山に続いていくイメージ」という内界体験としての融和感（第三象限）が強調されていると言えよう。このことは続く家、木、人、花についても同様である。

③の鳥に対しての違和感体験の語りと、④の雲についての違和感体験の語りは対照的である。鳥については、内界体験としての違和感（第二象限）と、環界体験としての融和感（第四象限）を同時に体験しているが、結果として、後者に焦点付けられた体験として語られている。一方、雲については、同様に内界体験としての違和感と、環界体験としての融和感が並列しながらも、前者が強調されている。セッション前に記入した質問紙において、Aさんは「風景の中で最も大切な要素」を「雲間からさしこむ光」としていた。Aさんの内界体験としての雲は、調査者によっ

て容易に融和されることを許さない対象であったのかもしれない。

人の頭に道の色が重ねられたことについての語り(⑤)は、Aさん自身の描画では塗らなかったのに、調査者は塗った、という客観的な違いの指摘以上のものを表していると考えられる。つまり、それは「これから山に向かっていこうとするその人」の顔に色が塗られたことへの違和感なのである。調査者もまた、即座にくあ、そうか、頭は……。>とその意味をどこか了解しているが、これは単に色を塗る物理的な場所を間違えたことだけではない、内界体験としての違和的な意味においての了解である。

次にAさんが語るのは、地面の色についてである(⑥)。地面について感じる、濃い色の感じと、「山まで侵食してきそうな」感じという内界体験としての違和感は、模写描画の全体的な印象(⑦⑧)に通じている。最終的にAさんは調査者の描画の「メルヘンチック」な内界体験としての違和感を指摘し、そのことから逆に自身の風景イメージの「ドキドキするっていうか緊張感があるみたい」な内界の体験世界についての気付きを得ているように思われる。

第一、第三象限に属する体験の語りが強調される山、家、木、人、花の場合に比べて、鳥、雲、地面の色にまつわる第二、第四象限に属する体験の語りの強調が、風景イメージの表現者としての〈私〉の体験をより強く揺さぶっていると言える。さらには、模写セッションの前に風景の大切な要素として「山に続く道」を挙げていたAさんは、セッション後に「山の荘厳さ、神秘さ」を加えていた。模倣前に重要であった雲と道に関しては、Aさんは内界体験として②と⑨で融和的に体験しており、それは、Aさんの風景描画を見守る際に、調査者もまた、同様のイメージを内的に体験していたことと無関係ではないように思われる。

まとめ

本論では、心理臨床における面接構造に含まれる「模倣される体験」を模擬的なセッションによって抽出し、そこに現れる被験者の体験の諸相を実証的に検討することを試みた。

日常的に、主体は自らが一応のまとまりをもった個体であると信じており、外側から「模倣される」ことによって、その自明性がわずかに、また場合によっては大きく揺るがされるように体験されると考えられる。つまり、自らの内側に収められていると信じていた自らの固有なはずである「私」を突然外側にも見出すのである。その揺らがされた主体の統一感を再度落ち着かせるためには、その体験で生じた漠然とした違和感を、環界の視覚的物理的要素の違いによって論理的に説明付けるか、もしくは自らの内界に生じた感覚を自覚し、その体感そのものの存在を確認することにより、「違和感を生じた〈私〉」という体感的な主体感覚にその拠り所を求めるかのいずれかが必要なのではないだろうか。これらは伊藤(2001)の言う分裂した“言表内容である〈私〉”と“言表行為者である〈私〉”、それぞれにおいて〈私〉が再確認されるあり方と言えるであろう。本論では「模倣される体験」において、このような〈私〉をめぐる体験様式が短時間のセッションのうちに複層的に展開することを示した。

クライアントの前に現前するセラピストは、同じ人間であるというだけでクライアント自身の似姿としても体験され得る。そういった意味で、心理臨床面接におけるセラピストはその存在そのものによってさえ、クライアントの“模倣される体験”を喚起させているとも考えられるだろう。だからこそセラピストには同時にその体験をほどよく抱える器としての機能も求められるのである。また、実際の面接関係においてこの模擬セッションの体験の諸相がどのように位置づけられるかは未だ明らかではないが、そういったより臨床実践的な検討は、今後の課題として残されている。

付記

本論文は京都大学大学院教育学研究科に提出した修士論文の一部を加筆修正したものです。調査にあたりご指導いただいた伊藤良子先生、および協力いただいた被験者の方々に、この場を借りて感謝申し上げます。

文献

- 伊藤良子(2001)：心理治療と転移—発話者としての〈私〉の生成の場 誠信書房
- Jung,C.G.(1921)：タイプ論 林道義(訳)(1987) みすず書房
- Jung,C.G.(1929)：心理療法の目標 林道義(編訳)(1989) C.G.ユング心理療法論 みすず書房 pp33-62
- 皆藤章(2004)：風景構成法のとくと語り 誠信書房 pp9-10
- 河合隼雄(1971)：コンプレックス 岩波新書 pp37-70
- 河合隼雄(1991)：イメージの心理学 青土社
- 木下康仁(2003)：グラウンデット・セオリー・アプローチの実践 弘文堂
- Lacan,J.(1949)：〈わたし〉の機能を形成するものとしての鏡像段階—精神分析の経験がわれわれに示すもの— 宮本忠雄(訳)(1972) エクリ I 弘文堂 pp123-133
- 中井久夫(1973)：風景構成法 中井久夫著作集2 精神医学の経験 治療 岩崎学術出版社
- 呉宣児(2001)：語りからみる原風景—心理学からのアプローチ— 萌文社
- Rank,O.(1914)：分身 ドッペルゲンガー 有内嘉宏(訳)(1988) 人文書院
- Sullivan, H. S.(1945)：Conception of Modern Psychiatry. New York: W.W.Norton. 中井久夫・山口隆(訳)(1976) 現代精神医学の概念 みすず書房 p21